

VII. 住民参加による 美しい農山漁村づくりの実践

1. 環境の共通認識と身近な環境からの実践

地域住民の環境共通認識が大切

住民参加による農山漁村づくりにおいては、そこで暮らす住民自らが地域の環境の成り立ちを認識し、互いに価値ある空間を共有しているという意識を醸成することが出発点となります。

● 共通認識は美しい農山漁村づくりの原点

美しい農山漁村づくりを進めるためには、地域住民が自らの日々の暮らしを通して周囲の環境に働きかけ、ライフスタイルを見直しつつ、美しく快適な空間を保全し、形成していくという意識が必要です。しかし、美しさに対する評価や価値観は人それぞれで異なりますから、住民参加の取り組みを効果的に進めるためには、先ずは、地域の景観や文化などの魅力について、住民がお互いに認識しあい、価値ある空間を共有しているという認識を醸成することが出発点となります。

環境の共通認識を持つことは、農山漁村づくりの活動全体を通して常に意識されるべき考え方です。これまでも述べられてきたように、農山漁村では、農林漁業との関わりを持ちながら暮らし、長い年月をかけて地域の文化を育み、世代を超えて農林地や海岸を守るという地域住民の絶え間ない努力によって、その地域固有の美しさが守られてきました。地域固有の景観には、一つ一つに成り立ちの意味があり、生産、生活上の必要性や地域の歴史や文化を踏まえた存在の意味を地域住民が共通的に認識し、必要なものとして理解していたからこそ、固有の魅力が保全され、伝えられてきたのです。

しかしながら、過疎化、混住化が進展する中

で、地域環境に対する価値の共通認識も薄れ、それに伴って、農山漁村の景観の悪化が見られるようになってきました。

たいへん貴重な自然資源や文化資源が賦存していても、誰も、その存在に気づいていないのであれば、それは無いに等しいと言えます。また、みんながその存在を認識していたとして



棚田の景観は、長い年月をかけた地域住民の営みが創りあげた地域の財産です。また、水辺の景観は地域固有の文化でもあります。都市住民がそこを訪れるとき、水と暮らしの関係が想起され、地域にある水土の知から今の生き方を省みることができるのです。

も、それぞれの人がその価値についての認識をお互いに理解し合う努力をしていなければ、その保全や活用の方法は異なり、個性あふれる地域の資源は、本来の姿を失い、瞬く間に異なったものに変質してしまうものです。

●地域の魅力は必ず見つかる

もう一度、みんなで、地域の環境を丁寧に見つめ直してみましょう。必ずそこには、生産・生活上の問題点を始め、景観と自然の保全や文化の継承における問題点が見つかるとともに、人を惹きつける地域固有の魅力も見つかるはずです。様々な地域の資源を地域社会で共有し、地域のアイデンティティとして位置づけ、活用していくことが大切なのです。



地域住民は、地域固有の美しい景観を阻害しているのではないかと疑問は持っていますが、それは個人の所有している空間であって、住民が共有している空間であるという認識はありません。



舟屋の佇まいは、地域らしさを醸しだし、共通認識が地域アイデンティティを生みます。

身近な環境に一人一人が役割を担い美しい農山漁村づくりを実践

美しい農山漁村づくりの実践活動は、無理をせず、身近な環境についてできることから順次実行し、女性、子供から高齢者までをも含む幅広い人々が、日常的な生活の中で持続的に無理のない活動をひろげていくことが大切です。

●私的—共的—公的へと繋がる活動

地域住民による、現実的で持続可能な美しい農山漁村づくりの実践は、まずは自宅周辺などの私的な空間における日常的な清掃活動や植栽等の美化活動から始まって、私的な空間と公的な空間との境目となる共的な空間（例えば、自宅の玄関から市町村道に接続するまでの自宅周辺の領域など）における清掃、美化、維持管理活動などへと広がります。さらに、地域の公共施設整備などにおいても地域の景観との調和に配慮したものとするべく住民が計画段階から積極的に関与していくなど、集落や地域全体の取り組みにまで発展し、将来的には、農山漁村地域の美しさや環境の保全に関心を持つ都市住民やNPO等とも連携した取り組みへと拡大させていくことが望ましい姿です。

集落周辺にゴミが散乱し、無秩序な土地利用が行われていれば、より大規模なゴミ等の不法投棄を誘発し、景観はますます劣化していき、住民の美しい景観保全・形成への意欲も薄れるものです。身近な環境改善からはじめることが地域全体の環境改善につながるのです。

●女性、子供から高齢者までが役割を分担して活動

従来の農山漁村社会において、集落内の道路や水路、寺社、公園・広場などの共同利用空間は、集落住民をあげて清掃、美化、維持管理活動を実施していましたが、高齢化、混住化の進展等に伴い集落機能は低下し、これら共的な領域における環境管理の取り組みはやりにくくなってきています。

地域住民がお互いに、共的な空間の役割を再認識するとともに、行政、都市住民、NPOとも連携した積極的な取り組みを行うための体制づくりなどの工夫をこらし、子供から高齢者までをも含む幅広い人々が、自らのライフスタイルに沿った日常的な生活の中で無理のない活動をひろげていくことが持続的な活動の実践に効果的です。



共的な空間の管理は、多くの人々の協力で実施します。



生垣・竹垣、屋敷林の維持管理、花いっぱい運動の推進で、日常の生活景観が、美しい農山漁村の景観となります。



子供たちは、農山漁村体験や農林漁業体験を通して、地域の生産と生活を知り、地域を理解し地域への愛着を持ちます。



炭焼き、わら・竹細工の技術や神楽、歌舞伎等の伝統芸能、みそづくりや郷土料理を、後世へ伝えていくために、高齢者、女性の役割には大きいものがあります。

生活のなかでの持続的な環境管理の取り組み

日常生活の延長線で取り組む	地域づくりを特別な活動と考えて取り組むと、一時的な充実感がありますが、持続力は落ちます。よって、特別な活動としてではなく、家事、仕事、学校、余暇等の日常生活の延長線上で活動が展開されることが大切です。
生活姿勢の見直しで取り組む	日頃から、自分が美しい農山漁村づくりにどれだけ関与しているのに興味を持ちましょう。仲間とお互いに、家庭で実践している環境保全の情報を共有しましょう。
地域教育の空間と捉え取り組む	豊かな人間形成を目標に、家庭・学校・社会教育等の一環として取り組み、自ら学び、自ら育てていく姿勢を持つことが大切です。

住民参加の活動を支援する行政や専門家等の役割

地域住民の意識啓発、利害の調整、合意形成に向けた意見の取りまとめ、組織づくり等に関して、行政や専門家は、**地域住民の自発的な活動を支援**していく必要があります。また、都市住民にも開かれた国民共通の財産としての美しい農山漁村づくりを進めるという観点から、**都市住民、NPO等の多様な主体の参加と連携を確保**しながら、農山漁村づくりを進めていく必要があります。

●住民参加活動を支援する行政の役割

美しい農山漁村づくりでは、地域の将来像を地域住民自らが描き、主体的に自分たちの地域を美しく快適な空間として保全、創造していくことが重要です。その際、美しい景観づくりに対する意識の啓発、意見聴取の場と組織づくり、地域内での利害の調整、合意形成に向けた意見の取りまとめ等に関して大きな役割を果たし、かつ地域の課題を熟知している市町村行政は、住民にとって身近な行政主体であり、相談役として頼れる存在となります。

市町村は住民活動の調整役としての役割のほかに、住民の合意を具体的な施策として実施したり、条例等の制定を通じて実効性のある取り組みにするための制度的な支援を行ったり、あ

るいは、直接、実施主体として美しい農山漁村づくりに関する取り組みを実践するなど、地域住民と共に活動を推進する役割が期待されます。

市町村が住民活動の調整役として機能する場合、あくまで主役は地域住民であることに留意し、合意形成の内容やその実現性については、地域自らの決定を尊重することが重要です。また、市町村は、住民による取り組みの各段階を通じて密接に連携するとともに、合意形成の内容やその実現性について適切なアドバイスを行い、活動が現実的で持続的なものとなるよう配慮することも大切です。常に、行政や専門家は、自分たちの意見や支援の方法が、地域づくりに大きな影響を与えることが多いことも踏まえ、あくまでも地域住民が主体的に考え、決定していくことを基本とするよう配慮しましょう。



行政・専門家は、地域住民に適正な場面で、適正な質と量の情報を提供していきます。住民と共に考えていく姿勢が大切です。

●都市住民やNPOも交えた活動も大切

さらに、近年では、国民が、ゆとりややすらぎをこれまで以上に重視するようになっており、都市住民は、農山漁村に対して、農林水産物を供給する以外の国土の保全、自然環境の保全、良好な景観、文化の伝承等の多面的な機能に期待をしています。都市化が進み、日常生活において自然に親しむ機会が減少する中で、都市住民の美しく快適な農山漁村空間に対する関心はますます高まるとともに、都市住民にも開かれた国民共通の財産としての農山漁村づくりも課題となってきています。

そこで、農山漁村が、地域住民の財産であるとともに国民共通の財産でもあることを踏まえ、農山漁村づくりにおいては、将来的に、都市住民やNPOなど外部の視点も取り入れた活動を行うことが重要となります。これは、都市住民のニーズに単純に応えるというのではなく、異なった視点から、地域の魅力を見直すのに有効となる上、過疎化、高齢化、混住化等の進展により発生している農地・森林や水の管理上の問題や景観の保全、文化の継承上の問題を、地域住民が都市住民と連携しながら解決し、農山漁村空間を守り、育てていくことを重視した取り組みとなります。



伝統的なはさ木の景観、農地の土手のカバープランツは、都市住民にとっても、癒される空間となっています。このような景観を維持するには、多くの手間がかかりますが、都市住民やNPOの協力も得ながら維持に努めてみましょう。農山漁村は、住む人も、訪れる人も、ほっと一息つける共有空間となっていくことでしょう。



行政や専門家が地域主体の活動を支援する場合の留意点

1. 夢も現実も大切にすること

何ができる何ができないということではなく、地域が描いた夢を大切にするようにします。それと同時に、現実的な目標も視野にいれ、地域住民の夢と現実のバランスを保つよう配慮することが重要です。また、おおまかであっても現実的な目標も視野に入れた実施スケジュールや優先順位についても検討することが有効です。

2. 合理的な根拠を明確にすること

農山漁村空間を美しく快適な国民共通の財産として形成していくためには、計画や取り組みができる限り誰もが納得する合理的な根拠を持ち、客観的な判断が可能のように工夫して、合意形成を導くように努めることが大切です。一方で、科学的手法のみを用いて意見調整を行うことは不適切な場合もあり、地域住民の和も重んじて、地域が納得するような合意に導くことが肝要です。

3. 楽しく取り組める要素を大切にすること

どんな活動も、おもしろく、楽しくなければ持続性を確保することができません。美しい農山漁村づくりの取り組みは息の長い活動であり、男性、女性、子供から高齢者まで幅広い住民が参加して、遊びごころも大切にしながら、楽しんで行うことが実効性を高め、持続性につながり、結果として効果的な地域づくりに結びつくことを忘れてはなりません。そのためには、日常的な活動の一部として取り組めるような仕掛けを工夫することが特に大切です。

4. 結局は人づくり

農山漁村づくりを実現するためには、地域住民をリードする優秀な人材を住民の中から掘り起こすことが大切です。また、地域住民は、様々な地域の専門家の集まりでもあります。外部から知識や見識を導入するだけでなく、地域内部の専門家の潜在能力を十分に活用するとともに、人材育成のための支援をしていくことも行政・専門家の大きな役割です。

具体的な支援の内容

情報提供について支援	必要な情報提供、助言、相談
	アドバイザーや専門家、実践者の紹介、派遣
	研修会、勉強会等への地区リーダーの派遣
	地区リーダーや住民による先進的な事例地等への視察
	活動の広報等によるPR、他市町村等に向けた情報発信
	他地域や都市住民との交流会、情報交換の場の設定
活動に対する支援	話し合いや会合、参加活動のための費用補助
	産直施設の整備、手づくり公園の整備等の住民が企画・計画したものの実現に向けての支援
	公共施設の開放、物品の貸与、配布資料の印刷
	自治体のホームページへの公開、観光用パンフレットへの掲載
その他	担当職員の配置と連絡体制の整備
	関連事業についての説明
	市町村の総合計画等への反映とそれにとりまう事業実施など



2. 住民参加活動のプロセスの重要性

美しい農山漁村づくりの主役は住民

美しい農山漁村を保全・形成するためには、地域住民が、①地域の生産・生活環境に関心を持ち、②活動に自主的に参加し、③地域の魅力ある資源を再発見し、④地域の現状と課題の理解を深め、⑤将来方向について検討し、⑥実践を通じて美しい農山漁村を創出する活動のプロセスを継続的に実践していく必要があります。この活動を経て生まれた具体的な成果がまた新たな関心を生みます。

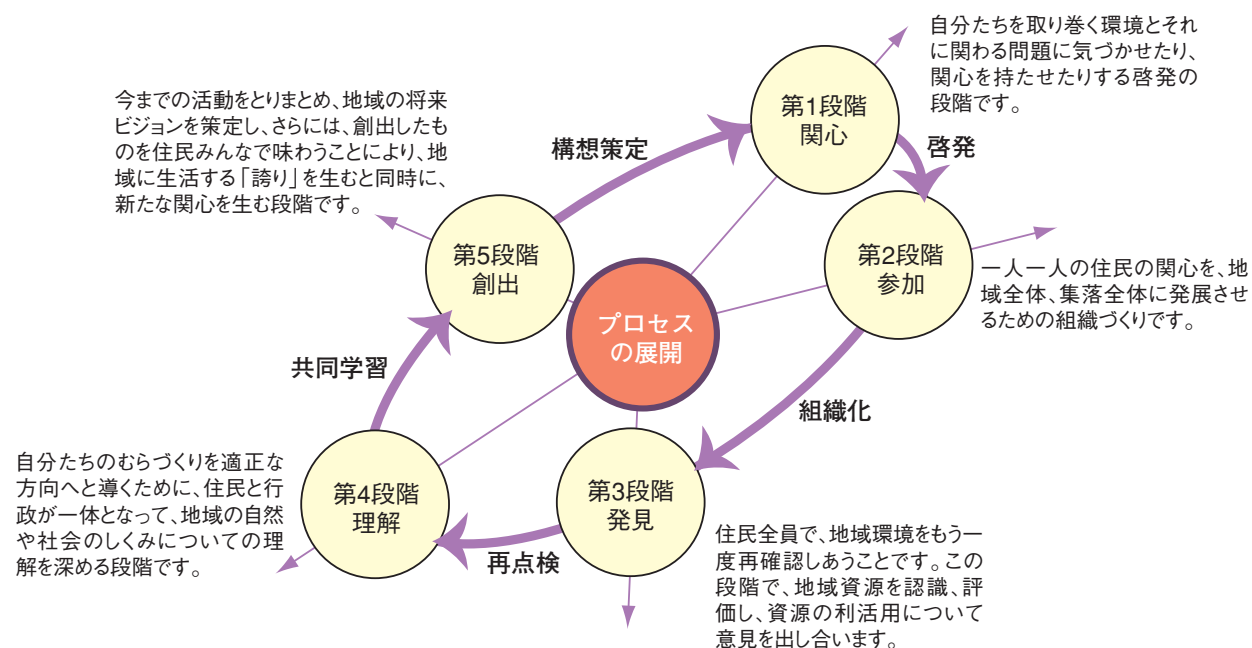
●住民参加の流れを創る

住民参加による農山漁村づくりの活動を効果的かつ効率的に推進していくため、関心—参加—発見—理解—創出の評価・学習の活動プロセスを継続的に実践していきましょう。

農山漁村づくりにおいては、まずは、自分たちを取り巻く環境の問題点や良さに「関心」を持つことが大切です。多くの人が関心をもてるような啓発活動を実行しましょう。そして、一人一人の関心が芽生えてきたら、次はみんなの関心を共有しあうための仲間づくりをしましょう。それが「参加」の段階です。仲間が集まれば、今度は、みんなで一緒に、集落環境点検などの

ワークショップ活動を通して、自分たちの環境を再点検する「発見」の活動をしていきましょう。そして、地域環境を評価し、利活用について様々な意見が出てきたら、地域の将来像を考えるため、地域の自然や社会のしくみについて「理解」を深め、どんな方向で地域づくりを進めることが望ましいのかを考えましょう。最後に、これまでの活動を取りまとめ、将来ビジョンを策定し、できことから実行に移していきましょう。

無理をせず、ゆっくりと、プロセスを楽しみながら、住民参加の活動を実践していきましょう。このプロセスの繰り返しが、美しい農山漁村を守り、創っていきます。



ステップ毎の目標・手法・行政・専門家の役割

	目 標	具体的な手法	行政・専門家の役割
意識啓発	関心 <ol style="list-style-type: none"> 1. 地域環境の現状、地域資源の賦存量と位置を知る。 2. 美しい農山漁村づくりについて住民一人一人が意見を持つ。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 地図、郷土史、行政資料等の情報を収集する。 2. 景観に興味のある住民が集まり、お互いの地域への想いや問題点を話す。 3. アンケート等により、生活・生産環境についての意見を徴集する。 4. 自分が知っている地域の資源や環境を認知マップにする。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 美しい農山漁村づくり、景観に関心のある人を発掘する。 2. 景観や環境についての捉え方や考え方について情報を提供する。 3. 都市住民、NPO等の景観づくりのパートナー、応援団を見つける。 4. 学校・社会教育関連の部局と連携する。
組織化	参加 <ol style="list-style-type: none"> 1. みんなが役割を持ち、活動できる体制をつくる。 2. 女性、子供から高齢者まで幅広く活動できる仕組みをつくる。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 景観に対する意識啓発のためのイベント等を実施し、幅広い住民の活動への参加を促す。 2. 既存組織が果たすことのできる役割について検討する。 3. 支援体制づくりのための話し合いをする。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 環境づくりに興味ある住民グループの情報を整理する。 2. 行政・専門家の支援方を整理する。 3. 関係機関への情報提供と調整を行う。 4. リーダー、核となるグループを探し、育成する。
再点検	発見 <ol style="list-style-type: none"> 1. 地域環境の再点検を住民みんなで行う。 2. 地域資源を評価し、利活用、保全の方法についてワークショップ等の活動を通して検討する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 景観評価会により、属性別の評価の差異を知り、検討視点を整理する。 2. 集落環境点検マップを作成し、地域の資源の発掘、環境についての課題整理を行う。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 景観評価会や集落環境点検の活動を支援する。 2. 住民等がワークショップを進める場合に、方法についての指導を行う。 3. 関係機関への根回しとPRを行う。 4. 住民が主体的に活動できるように工夫する。
共同学習	理解 <ol style="list-style-type: none"> 1. 地域の自然・社会・経済について深く理解する。 2. 景観づくりの先進事例について知る。 3. 問題の解決方法について検討する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 様々なワークショップにより、地域環境の問題点と解決方法について理解を深める。 2. シンポジウムや講演会を開き、活動の広報を行うと共に、広く意見を徴集する。 3. 先進事例地区の視察や事例の勉強会を行い、感性を磨く。 4. 景観シミュレータ等のツールにより景観を予測し、合意形成を図る。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. テーマにあわせて効果的なワークショップの手法を指導する。 2. シンポジウムや勉強会開催のための専門家の紹介や先進事例地区の紹介をする。 3. 問題解決のためのデータの収集や基礎知識の提供を行う。 4. 景観シミュレーションの作成を支援する。 5. 解決策の実践に向けて、関係機関の支援方を検討する。 6. 適正な合意が進むよう後方支援する。
構想策定	創出 <ol style="list-style-type: none"> 1. 美しい農山漁村づくりについての地域ビジョンを策定する。 2. 地域のビジョンの実現を目指した検討グループをつくる。 3. 地域毎のルールづくりを行う。 4. 応援体制を作る。 5. 活動の楽しみや達成感を味わう。 6. 次の実践に向けて、これまでの活動の評価と反省を行う。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 美しい農山漁村づくりのための地域ビジョンを策定し、地域での合意を得る。 2. 地域ビジョンを、地域住民に公開する。 3. 実践活動計画を策定し、できることから順に実践に移す。 4. 景観づくりのための協定、生活のルールづくり等を策定し、実践する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 解決策に住民の意見が反映していることを確認する。 2. 実践活動が適正に行われるように支援する。 3. ルールづくりについての後方支援を行う。 4. 関係機関への広報を行う。 5. 実践活動の記録を行う。 6. 新たな問題点や関心の発掘と啓発を支援する。

農山漁村の美しさへの意識啓発と仲間づくりー関心から参加へ

住民参加による農山漁村づくりの活動では、先ず初めに、地域住民の一人一人が、自らの生活する農山漁村において、**地域環境のすばらしさや問題点**に気づき、**地域景観、自然環境、伝統文化等**に関心を持つことが大切です。そして次に、この住民一人一人の関心を、**地域全体の関心**として発展させるために、**仲間づくり、組織づくり**をしていくことが大切です。

●自分をとりまく環境に関心を持つ

日頃から、地域の環境について常に関心を持ちながら生活することは、案外難しいものです。台所から流れ出ていく排水を、いつもいつも、行く先を考えながら流している人は、そんなにはいないでしょう。また、農作業時や通学の時などにいつも、あの家の生垣はとても美しいとか、あの鎮守の森を将来まで残しておきたいなどと強く意識していることも少ないものです。地域の景観については、住み慣れて当たり前になってしまっているため、なかなか関

心を持って見るができなくなっています。

地域住民の地域環境に対する意識を啓発し、美しさに対する感性を向上させるためには、住民一人一人が、自分のライフスタイルや生活周りの環境の見直し等を行い、身近なところから農山漁村の美しさについて関心を持つことが何よりも大切です。

難しく考える必要はありません。日頃より、ちょっと心にゆとりを持って、「あれは良いな・悪いな」とか、「昔は違ったよな」とか「子供たちに残していきたいな」とか、「こうしたらもっと良くなるのに」とか、身近な環境や景観と自分の行



農林漁業の営み、生き物との共生、伝承される文化、調和した集落の佇まい等、関心と呼ぶ素材は、農山漁村の中にたくさんあります。身の周りの環境の見直しや、何気ない日常的な景観、地域の行事について関心を持ち、自分なりの意見を持つてみるのが大切です。

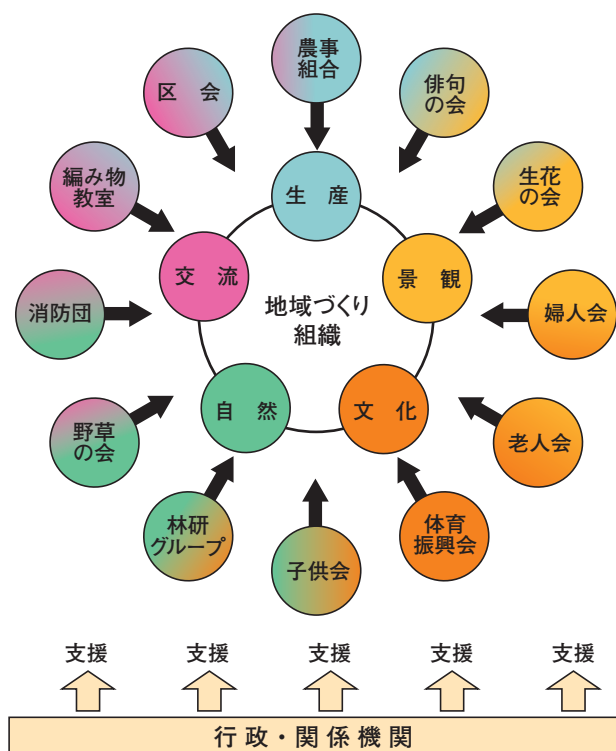
動に気をつけてみましょう。住民参加による農山漁村づくりは、そんな生産・生活点検、環境家計簿づくりから始まります。

●参加しやすい組織を創ろう

そして、住民一人一人の環境に対する関心が高まってくると、活動を通して、農山漁村づくりについて、自分と同じような意見や違った意見を持つ仲間がたくさんいることがわかってきます。美しい農山漁村づくりで重要なことは、住民同士で、いろいろな立場の人の意見をまとめて、地域の環境を守り・創るために自分たちがなすべきことについて合意していくことです。そこで、住民参加によって、合意を形成しながら、ルールをつくり、共有する目標を達成するため、意見をまとめる「場」としての組織づくりが必要になってきます。この段階では、子供、女性、高齢者等を含む幅広い地域住民層がそれぞれの立場から、得意分野を担う様々なグループを通して、関心事項について忌憚なく意見を出し合える場を作りましょう。また、景観・自然の保全、文化の伝承等の目的別に活動ができ、行政や専門家が支援しやすい組織を作るよう心がけましょう。

関心から参加への活動においては、環境に関心のある地域住民にも、そうでない住民にも、

地域環境や景観に関心を持ってもらうために、環境認知マップづくり、景観コンクール、シンポジウム、イベント等を通して、幅広く住民参加を呼びかけることが効果的です。



地域の文化祭や収穫祭等を活用して、自分たちを取り巻く環境についての関心の輪を広げ、組織づくりのきっかけを作りましょう。

現状把握と課題整理のための再点検—発見

多くの住民が農山漁村づくりの活動に参加するようになったら、次に、地域の環境を景観、伝統文化、自然環境等の様々な側面から再点検し、現状とその課題について整理したり、それまで気づかなかった地域の魅力を改めて認識したりする活動を進めましょう。

●地域の個性と魅力の発見

関心の段階では、地域環境の中でも、特に、自分の生活周りを中心に関心事を見つけていきました。そのため、どちらかというと、マイナス面を抽出したり、足りないものを探したりという観点から、地域環境への関心が高まったかもしれません。そこで、発見の段階では、もっと、環境を地域全体に広げてみるとともに、多様な価値観を通して、プラス面を探し出す活動をしましょう。

これまでの農山漁村づくりは、行政が行うもの、やってくれるものという認識が多かったと思います。しかし、このような行政依存型の地域づくりは、地域住民が十分に地域環境を理解し、合意したものではないため、ないものねだり的な地域づくりとなる傾向が強く、地域にふさわしくないもの、いらないものまでをも創り出してしまう場合もあります。

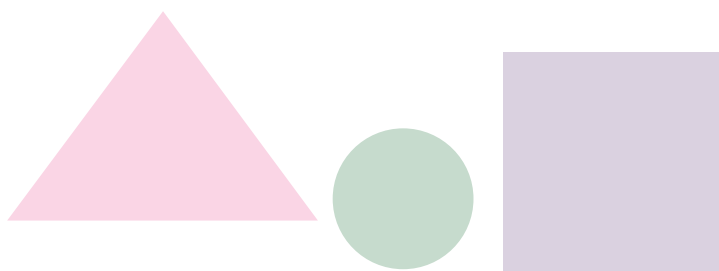
高度経済成長の時代を経て、「ものの豊かさ」から「こころの豊かさ」へと人々の価値観が移行しつつある今の時代に必要なのは、地域が

現在持っていながらも忘れ去られており、地域の個性を表わしている地域独自の魅力ある資源を探し出し、それを地域の宝として住民の暮らしの中で守り育てていくことなのです。

このような意味において、住民の地域環境への関心が深まり、地域全体の活動に発展していけば、次には、地域の環境や景観の美しさに関する評価を景観アンケート等を用いて行う景観評価会を実施したり、住民全員で、地域環境の現状を点検し、魅力ある資源を発見する集落環境点検や意見整理とアイデア集約のためのTN法などの様々なワークショップ活動を実施していきましょう。

これらの活動は、自分たちが住まう地域に関する知識を広げ、住民どうしで地域環境に対する共通認識を持つことができるとともに、魅力ある地域づくりへの参加意識を醸成することができます。

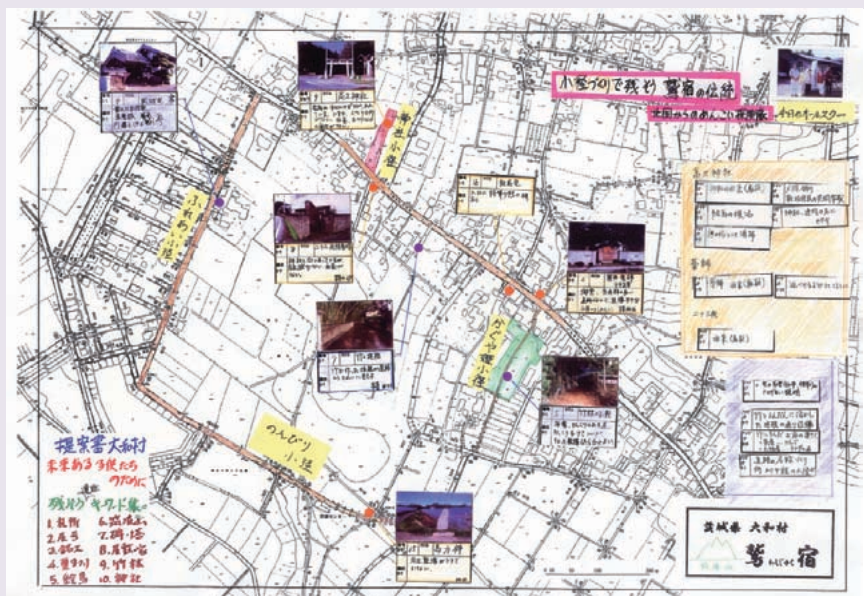
そのためにも、住民が、地域の魅力や美しさを構成している要素や地域資源を認識、評価し、その利活用について忌憚なく意見を出し合うことが大切です。



自分たちの生活空間を再発見する —集落点検ワークショップ—



「百聞は一見に如かず。」
とにかく、歩いて見てみま
しょう。みんなで、あれや
これやと自由に意見を出し
合いながら、集落環境点検
をし、点検マップに整理し
ている内に、地域の本当の
姿が見えてくるものです。



1. 目的と基本的姿勢

「関心」～「発見」の段階においては、景観に対する意識の啓発を行うとともに、自分たちの地域の景観が、それぞれの住民の心の中にどのように映っているのかをお互いに知り合うことによって、新たな発見をしていくことが大切です。よって、アンケートの基本的姿勢は、住民に分かりやすく、楽しく、おもしろく、興味深く、結果の報告が待ち遠しくなるものでなければなりません。固定した人や組織ばかりを対象にせず、環境に興味のある集団はもちろんのこと、あまり興味のない集団も対象に考えておく必要があります。このアンケートを契機に、更に、活動の賛同者を増やすことも大切です。

2. 具体的な手法

①方法

②種類

意識啓発や地域再発見の景観意識アンケートでは、集合調査が適切です。集合調査とは、調査対象者に特定の会場に集合してもらい、調査票を配布し、説明や教示を与えて、その場で回答を記入してもらう方法のことを言います。住民が一堂に会するところから、充実した回答を得やすく、配布、回収の経費や労力が少なく済みます。また、設問内容をかなり複雑にしても実施可能です。景観、環境に関する調査のように写真の音もスライド等で提示しなければならない場合でも、視聴覚機器を利用して内容を深めることができます。緊張した雰囲気をほぐし、質問にゲーム的要素を取り入れたりして、自由な回答ができるような雰囲気づくりが必要です。

集団反応分析装置を使ったアンケート調査

集団反応分析装置は、一人一人が集計装置やパソコンと連動した選択ボタンの付いたスイッチを持って、アンケートにその場で回答する方法です。設備を集会所等へ搬入、設置しなくてはならないし、人数も制限され、質問形式も5者択一の多肢選択法に限定されていますが、集計が即座にでき、結果を示せる上、スライドや液晶プロジェクタなどのビジュアル機器を多用してクイズ番組のような雰囲気でアンケートができます。

③回答形式の種類

回答形式は、より楽しく、興味を持って回答してもらうのに重要な視点です。地域の景観写真を使って、「好きか嫌いか」、「良いか悪いか」程度の簡単な質問を行うのが効果的です。また、回答者は子供から高齢者までが対象となることから、子供たちが最後まで飽きない工夫や、高齢者に見やすい、読みやすい、聞き取りやすい配慮が必要になります。以下には、より効果的な気づきに繋がる回答形式の一部を紹介します。

1)自由回答法

自由回答法は、質問文だけを用意しておき、回答を自由に記述してもらう形式であり、自由記述法と呼ばれています。

2) 語源連想法

語源連想法は、イメージ調査などに興味のある結果を得ることができます。この方法では、質問1のように刺激語を与えて、それから連想されるものを書かせるのが一般的です。刺激語としては、簡単な表現で、各種の連想語が期待できること、調査対象者の誰もが理解できる内容であることが要求されます。

質問1： 下の左側に集落名が示してあります。「山」という言葉に対して、「富士山」、「阿蘇山」、「登山」、「アルプス」……などと思いつくように、これらの言葉を聞いて、あなたが思いつくことを、右側の枠に順に書いてください。どんな事でもかまいません。

件 名	思いついた事 1	思いついた事 2	思いついた事 3
(例) 静岡県	お茶	富士山	みかん
〇〇集落			
××集落			

3) 多肢選択法

多肢選択法は、質問に対して、数個以上の選択肢を用意し、回答をその中から選択させる方法です。選択肢は独立しており、意味が相互に重複しないことが必要です。また、選択肢の数は数個から、多くても10個以内にとどめたほうが良いでしょう。

4) 一対比較法

一対比較法は、一群の調査項目から任意の2項目を取り出して、一定の価値基準による大小関係の比較判断を求める技法です。n個の項目の場合、そのすべての組合せの比較判断を行って、項目間の順位を決めます。

質問2：以下に、形態がそれぞれ異なる施設整備事例が対にして示してあります。

この2つの事例のうち、あなたはどちらが好きですか。好きな方に○を付けて下さい。



注意： この2つから選択したものを整備するということではない。

②設問内容

「関心」～「発見」段階での設問設定に当たって最も重要なことは、多くの住民が景観に関心を持ち、地域環境に対する様々な想いを知り合えるような共通的な話題を設定することです。また、環境や景観づくりだからといって、「環境・景観について…」等という質問をするのでは啓発や気づきの効果は低いと言えます。直接的ではなく、間接的に景観づくりに結びつくような話題が望ましいのです。

共同学習を通した具体的な構想策定に向けて—理解から創出へ

地域の魅力をたくさん発見したら、次に、これらを活かした農山漁村づくりについて理解を深めるため、住民が行政、専門家、NPO等とも連携して、共同学習を積み重ねましょう。そして最後に、これまでの活動を取りまとめ、地域の将来像を策定し、実行可能なものから実現に移していきましょう。

●地域の魅力を育むための学習

現 状把握と課題整理のための地域の再点検が十分にできれば、地域の魅力は、思った以上にたくさん出てくるものです。地域の魅力について、その価値を共有できるようになったら、次に、この魅力を育み、活かしながら美しい農山漁村づくりを進めるための具体的な行動や自分たちで守るべきルールを作る活動について検討しましょう。そのためには、先ず、住民が、行政や専門家等の支援を受け、知識や意見を取捨選択しながら、地域社会の現況や社会的情勢から予想される将来像、自然環境の構造や文化的・教育的な地域資源について十分な知識を得るとともに、その保全や復元、新たな利用の方法について検討することが大切です。

この段階では、住民が学習しやすい場と学習のためのわかりやすい情報を提供していくことが、行政や専門家の大切な役割となります。行政や専門家は、住民の活動を支援しながら、共に地域の環境について学習する姿勢が重要です。

●合意を促進するための技術を活用

美 しい農山漁村景観を保全・形成するためには、住民どうしが地域景観に対する共通認識を持つことが必要ですが、景観は一般的には視覚的に捉えられるため、言語のみによって住民間の意思疎通を図ることは難しいものです。そこで、景観の俯瞰や眺望、施設や建築物のデザイン・色彩等の検討について、住民の理解を助け、効果的・効率的に作業を進めるために、問題解決や方向性を探るための景観アンケ

ートを実施したり、景観シミュレーションを積極的に活用しましょう。景観シミュレーションは、景観予測画像を作成するツール(道具)であり、住民の意見を具体的にデザインに反映し、修景後のイメージをお互いに確かめ合い、合意形成を円滑に進めることができる点で、有効な合意形成の技術となるでしょう。



地域に生息する動植物についての調査やその保全方法についての知識を行政や専門家から学びます。長老や学校の先生にも協力を仰ぎましょう。水質のバックテストを実施して、具体的な数値で環境を知るのもおもしろいでしょう。そこから将来の目標値も生まれてきます。



「散歩ができる石積み水路」の景観と言っても、人によって想像するイメージは異なります。景観シミュレータで将来像を予測しておくことで、問題点が明らかになり、住民の合意形成もしやすくなります。

●地域のルールをつくる

地域の自然や社会の仕組みについて十分に理解を深め、地域の将来像を適正に描ける準備が終われば、最終的な段階として、これまでの活動をとりまとめるとともに、住民の合意を得ながら、基本的な構想や計画を表した地域のビジョンを策定しましょう。これらのビジョンやマスタープランは、各種事業の計画的な推進や法律的な規制・誘導に効果的に働きます。

如何にすばらしい地域のビジョンを策定しても、住民一人一人が、日常的に意識して、それを実現するための努力を重ねなければ、暮らしやすい環境や美しい景観は守れません。そこで、住民合意の下に、「協定づくり」を行い、自分たちで守るべき生活や景観美化のルールを作っておくことが効果的です。ビジョンづくりもそうですが、あまり無理な目標を設定せず、少しがんばればできる程度のことからルール化を図っていきましょう。

しかし、最初から具体的な実践を導き出すこ

とにはこだわらず、住民参加の下で作成されたビジョンやマスタープランの策定だけでも立派な成果と考えましょう。その成果が、また新たな関心を生み、更に発展して、具体的な実践を目指すプロセスが動き出すことでしょう。

また、美しい農山漁村景観を持続的に保全するためには、運営や管理の仕組みを整備することも必要となります。そのためにも、楽しく、住民が自らオーナーシップを実感できるような取り組みをしましょう。地域住民が、無理なく、楽しく参加することで、地域づくりに携わる手応えや喜びを感じられるような活動であれば、その取り組みは持続的なものとなります。

